

# 国際円座「訳語問題から近世社会を掘り下げる」

## 近世大坂の非人史における訳語問題

ジョン・ポーター

### ◆要旨

本稿は、近世大坂の非人を事例として取り上げ、日本近世史というフィールドで活躍している翻訳者が直面する基礎的な問題を紹介することを意図しており、そうした問題を克服するために、いくつかの実用的な手法を提示しようとする。まず、先行する歴史家や翻訳者によって活用された翻訳手法を簡潔に説明した上で、そうした翻訳手法が孕む限界性を指摘するとともに、よりの確な翻訳をするために、いくつかの方法論的テクニックを提案する。

次に、自らの翻訳経験を踏まえて具体的な訳語問題について述べる。塚田孝氏の近世身分社会をめぐる研究で論じられた二つの主要な概念である「非人」と「権利化」について、その歴史的内容と翻訳の実際を考察することによって、これまでの英文による賤民史研究の問題点を明らかにする。

最後に、以上の考察をふまえて、翻訳対象となる歴史存在の本源的あり方とその歴史的变化に留意した、的確で豊かな翻訳が必要であることを主張したい。

キーワード：翻訳、日本近世史、非人、近世身分社会

## 1. はじめに

まず自己紹介から始めたい。現在、私は、特別研究員として大阪市立大学の都市研究プラザに所属している。他の報告者と違って私の専門は近世史ではない。実は、私は近代大阪の都市社会史を研究しており、主要な関心は、都市貧困と急性伝染病との関係にある。

私は決して翻訳の専門家ではないが、昨年春に幸運にも、塚田孝氏からご依頼をいただき、同氏の優れた作品である『都市大坂と非人』の翻訳作業を引き受けることができた。この本で、塚田氏は、近世大坂の公認された非人集団である垣外仲間の成立過程や歴史的な展開を論じるとともに、垣外仲間の内部構造や他の社会集団との関係を分析することによって近世の身分制と都市社会の特質を探っている<sup>1)</sup>。読んでみると、極めていいねいに分かりやすく書かれているが、翻訳作業を行う過程で多くの翻訳しづらい言葉や概念に出くわし、ひじょうに苦労した。

『都市大坂と非人』の英訳原稿はようやく2011年3月に完成できたが、今日はその経験を踏まえながら、近世大坂の非人史における主要な訳語問題について考えさせていただきたい。

英語圏の最も著名な日本史研究者の一人であるジョン W. ホール氏が1983年の論文で書いたように、「英語で

日本について執筆する」という行為は必然的に一つの言語や考え方から別の言語や考え方への翻訳や変容という行為と同然である。私は、氏の主張に賛同したい。実際に翻訳作業にあたると、英語と日本語の本質的な違いや両言語の特徴を痛感する。しかし、英語で日本史について論述する必要があるため、こうした問題で諦めることはできない。むしろ両言語の違いや特異性を克服するために、何らかの手法を構築する必要がある。そこで、可能な限り本報告を通してその手法を考えてみたい。

戦前以来、1970年代までの英語圏の研究者は、日本近世史の主要な概念を、西欧近世史における枠組みや範疇を通して説明しようとした。この傾向はカリフォルニア大学のトーマス・スミス氏の研究などに明瞭に窺える<sup>2)</sup>。しかし、1980年代に入ると、ホール氏たちを含めて、英語圏に活躍している多くの研究者は、その手法の限界性を指摘するようになった。「仲間」や「株」のような基礎的概念を、西欧史の枠組みを通じて説明すると、必ずみ出る部分や、完璧には該当しない部分が出てくる。つまり、西欧史の枠組みを使うことによってその特質が見えなくなってしまうのである。

具体例を挙げると、「仲間」を Guild と訳せば、読者は中近世ヨーロッパの Guild にまつわる様々な先入観に基づいて仲間のあり方を想定してしまう。しかしながら、細部に踏み込めば、近世日本の仲間は、中近世ヨー

ロッパの Guild と類似する側面を持ちながらも、ずいぶん異なる特徴を持っている。その成立過程という点では、中世ヨーロッパの Guild が 12-13 世紀から町レベルで自生的に展開し、成立期から商人組織と併存・対立したのに対して、近世日本の仲間組織は 17-18 世紀から商人集団を基礎に形成された。また構造的特質という面では、日本近世の仲間にはフランスの corps de métiers = 機能的分業がほぼない。さらに、社会的機能においても、中近世ヨーロッパの Guild が商人階級の下で従属的に編成されたのに対して、近世日本の仲間は商人階級を組み込んだ形で展開したのである<sup>3)</sup>。つまり、一見完璧に該当するような言葉の場合においても、多様な本質的な相違が潜在しているのである。そのため、仲間の意味を正確に把握するためには、近世日本の身分社会の特質や固有のロジックを前提にしながら、特定の地域的な枠組みの中で検討し、説明する必要がある。

1980 年代の半ばから現在に至るまで、多くの英語圏の研究は、近世社会のあり方から断絶した形で、あるいはポスト・モダンの枠組みを通して近世日本の社会的特質を語ろうとしてきた。1980 年代の半ばから、英語圏の日本史研究ではポスト・モダンの研究手法が流行した。ヨーロッパの中近世史の枠組みを通して日本史を語るという手法に入れ替わる形で、多くの英語圏の研究者はポスト・モダンの研究手法や概念的枠組みを用いるようになった。この傾向は、英語圏における近世史の各分野にも該当するが、なかでも思想史で最も強いと思われる。典型的な事例としてナオキ・サカイ（酒井直樹）氏の伊藤仁斎に関する思想史研究を挙げることができる<sup>4)</sup>。

しかし、ポスト・モダンの影響をうけた多数の研究者は、日本近世社会の構造的特質やその内在的なロジックをほとんど考慮しないまま、言説の分析を通じて個人や思想家の自己認識と世界観を論じている。大まかに言うと、こうした研究の多くは近世社会の一般性や普遍的な側面のみに着目し、その社会の固有性を十分に考慮しない。しかし、私の理解では、近世社会の全体像を掴むためには、その社会の一般性と固有性を統一的に把握する必要がある。一般性だけに重点を置き、抽象的なレベルだけで日本の近世史を論じるなら、近世社会の最も本質的な部分を見逃してしまう。

恐らく翻訳のプロセスにも同じような危険性が孕まれていると思われる。つまり、「非人」や「株」など、日本近世史の最も本質的な概念を英語化すると、一面でその概念の特殊性が翻訳の過程で失われる。そのため、言葉は軽々に使うわけにはいかない。英語表現を選定する時に、当然のことながら、まずは訳そうとしている概念の意義や本源的なあり方を正確に把握しなければならない。それにくわえ、その概念の歴史的展開あるいは変容過程をもきちんとおさえる必要がある。

## 2. 非人の事例

ここで具体例として非人という概念を取り上げたい。よく考えれば、これはなかなか訳すのが難しい言葉である。多くの英語圏の研究では、非人は Beggar（乞食）と訳される。一見すると、Beggar という表現は相応しいように見える。つまり、非人の生活基盤は勧進であり、物を貰うことによってその生存が保障されていたからである。

しかしながら、非人の存在形態は全時代を通して一貫していたという訳ではない。むしろ時代とともにその存在形態が変容したため、非人の本源的なあり方（貧人 = 非人）と 18 世紀半ばのあり方はずいぶん異なるものになった。塚田氏が鋭く指摘されているように、近世初期において大坂の非人は全ての所有から疎外され、現代の野宿者に共通する性格を持っていた。しかし、その後、大坂の非人は様々な集団的特権を確保するようになり、大坂町奉行の下で警察関係の御用を勤めるようになった。したがって、18 世紀半ばになると、非人は単なる乞食では無くなったのである。

しかし、大坂の非人組織である垣外仲間が形成されてからも、新たに単なる乞食 = Beggar が市街地に現れ続けていた。彼らも近世日本の身分制度の中で「非人」として位置付けられていた。ただし、彼らは垣外仲間には属する非人と違って、「野非人」「新非人」などと呼ばれ、18-19 世紀においても全ての所有から疎外された存在であった。原則として彼らは大坂三郷内で発見されると、すぐに市外へ連れ出されていた。しかも身分制のもとで彼らの統制と救済は、垣外仲間には属する非人に委ねられていた。

以上のように、非人という身分範疇の中には複数の存在形態が含まれており、言葉を訳そうとする際にもこうした内部的な多様性を念頭に置かなければならないのである。

以上をふまえ、訳語の問題として考えると、非人は簡単に Beggar と訳すことはできない。確かに明治初期（明治 4 年の「賤称廃止令」の発布）まで、勧進は非人の生活基盤であり続けていた。したがって、非人は一方で近世の全時代にわたって Beggar と類似する側面を保っていたと言える。しかし、その反面で、かつて全ての所有から疎外されていた大坂の非人は、所有主体に変質した。つまり、非人の存在形態は 18 世紀半ばまでに大きな変容を遂げたのである。非人という固有の歴史的存在を単に乞食と表現するのは、非人が遂げた変容過程を否定するのと同然ということになる。したがって、非人の全体像を正確に英語化するためには、非人の乞食としての側面のみに着目するわけにはいかない。むしろ非人の

歴史的変容や社会的位置を踏まえた上で表現する必要がある。言い換えれば、動態的な捉え方が必要だと思われる。Beggar という表現を用いれば、非人という多面的で歴史的な存在に、一面的で固定した意味を付与してしまう。歴史家として、それはひじょうに危険な行為であるので、翻訳の際には十分な注意が必要だと思われる。そして非人についても一点述べると、かつて非人は「えた」と一括され、Outcaste と翻訳されることも多かった。この英語表記にもいくつかの大きな問題が孕まれている。まず、Outcaste (賤民) という表現を直訳すると、「身分外」あるいは「身分制外」という意味になる。しかし、非人は決して近世日本の身分制度の外に存在したわけではない。むしろ、他の身分集団と密接な関係を取り結ぶことによって、非人の生活は成り立っていた。したがって、非人の歴史的あり方を明らかにするためには、きちんと身分制の中に位置づけて考える必要がある。以下では、大坂の非人を対象にして、この点を詳しく見て行きたい。

周知のように、大坂の非人は、17世紀初期から個別の身分集団(四ヶ所仲間/垣外仲間)を形成し、独立した集住区域や独自の身分内法を持っていた。その上に、町奉行所の盗賊方や町廻方下での警吏としての御用を勤めることによって権力と密接な関係を持ち、野非人や新非人の救済と統制にも重要な役割を果たした。それとともに、徐々に垣外仲間の構成員は、大坂市中の個別の町と出入り関係を築き、その出入り関係に基づいて彼らの生存が保証されたのである。つまり、出入り関係を結ぶことによって、大坂の非人は特定の町で勸進を行う権利を取得することができた。特定の町における勸進権を得た非人は、見返りとしてその町へ自らの弟子を派遣し、番人を勤めさせなければならなかった。大坂の非人にとって、こうした関係は不可欠なものであった。2011年のAssociation for Asian Studies 学会報告で塚田氏が述べたように、非人の生活基盤であった勸進は「それを与える町方・町人を抜きにはあり得」ないものだったのである。

以上の事実から明らかのように、近世初期から大坂の非人は、決して都市大坂の社会システムの外に存在していたわけではない。むしろ他の社会集団と関係を保つことによって彼らの生活が可能になった。したがって、非人の歴史的なあり方を的確におさえるためには、都市社会の複合的な関係性の中で位置づけながら捉える必要がある。しかしながら、Outcaste という表現を用いてしまうと、大坂の非人が近世大坂の身分制度の外に存在していたと暗示し、以上の関係を不明瞭にしてしまう。そのため、非人の英訳として Outcaste は決して妥当とは言えないのである。

### 3. 権利化の事例

次に、非人の事例に即して権利化(あるいは株化)という概念の意義を考えてみたい。この概念も『都市大坂と非人』を翻訳している間に、何度も出くわし、なかなか相応しい英文表現が見つからなかった。権利化の意義を検討する際、まず念頭に置かなければならないのは、この概念には二つの含意があることである。一つは権力による公認で、もう一つは集団内の共有(相互承認)である。

前者については、近世史の文脈の中で捉えると、権利化は、一面で権力による公認という意味を持つものと理解できる。大坂の非人の場合には、町方での勸進権(町旦那株)が、生きる道として公認され、町奉行の許可のもとで町人地を歩き回って物乞いを行うことができた。ただし、権利化は単に公認という意味だけではない。権利化の意味合いを考えると、もう一つの重要な側面を語る必要がある。それが後者の集団内の共有である。つまり集団の内部にある権利を分割し、一定の秩序に基づいて共有するという意味である。大坂の垣外仲間(町旦那株)に即して言えば、仲間の内部において町旦那株という名目で事実上の勸進権を分け合っており、共有するということである。しかも18~19世紀において町旦那株は垣外仲間の構成員の間で売買・貸借されるようになり、ある種の「資本」としての性格を帯びるようになった。

したがって、権利化という概念を英訳しようとする際に、こうした二面性を前提に説明する必要がある。そのため、一方で権利化とは、「The process of a specific act or function gaining recognition or status as an official right」であると同時に、「The process of a specific act or position coming under the control of a status group and becoming organized around a clearly defined set of principles governing its ownership and distribution」でもある。

極めて複雑な概念であるので、実際に翻訳しようすると、相応しい表現が容易に見つからない。したがって、権利化の歴史的な性格をきちんとおさえるためには、少なくとも二つの局面から考える必要がある。つまり、権力との関係性の中での権利化の意義と、集団内部での権利化の意義を統一的に把握しなければならないのである。こうした理解が前提になれば、仮に直訳が不可能のままであっても、英語で正確に説明することが可能になるのである。

### 4. 結び

以上、非人の事例に即して、いくつかの具体的な訳語

問題を見てきた。従来の翻訳の方法に対する批判を交えながら、新たな手法を提示しようとして来た。

近世史の主要な概念の場合には、残念ながら完璧に該当する英語表現はなかなか存在しない。しかも無理に訳してしまうことによって、一面的で固定したイメージを与えると同時に、その概念の特殊性や歴史性を見失わせる危険性があると思われる。静態的で恣意的な翻訳を避けるために、非人のような基礎概念を英語化しようとする際には、可能な限り、その概念の本源的なあり方と歴史の変容過程を踏まえなければならない。そのようにして、初めて歴史性を考慮した動的な論述が可能となる。そのため、西欧近世史などの既存の枠組みや概念に頼らずに、我々翻訳者は、近世身分制の社会的特質や固有の

ロジックをきちんと理解した上で、その基礎概念を表現する必要がある。要するに、的確な翻訳の手法は、実体的な社会把握の方法から始まり、それと表裏一体の関係にあるのである。

## 注

1. 塚田孝『都市大坂と非人』山川出版社、2001年。
2. Thomas C. Smith. 1959. *The Agrarian Origins of Modern Japan*. Stanford: Stanford University Press, et al.
3. Fernand Braudel (Trans. Sian Reynold). 1992. *Civilization and Capitalism, 15<sup>th</sup>-18<sup>th</sup> Century: The Wheels of Commerce*. Berkeley: University of California Press, 314-325.
4. Naoki Sakai. 1991. *Voices of the Past*. Ithaca: Cornell University Press.

# Translating the History of Early Modern Osaka's Hinin

John Patrick PORTER

This essay was originally presented as part of a July 2011 symposium on translation and Japanese history. Focusing on the example of Osaka's hinin, it introduces a number of the general problems facing translators working specifically in the early modern Japan field. In addition, it outlines some basic methods for resolving those problems. The essay begins by briefly describing the techniques employed by previous generations of translators. After pointing out the limitations of each of those techniques, it then suggests some simple methodological steps that scholars can take to raise the accuracy of their translations and avoid mischaracterizing the concepts with which they are engaging. The essay then shifts to a discussion of the author's experience translating Tsukada Takashi's work on early modern Osaka's hinin. Through an examination of two key concepts dealt with in Professor Tsukada's research, hinin and kenrika, it offers a critique of conventional English translations of both concepts. It then concludes by suggesting some concrete methods for how conventional translations can be improved. Specifically, it asserts that scholars need to consider not only the original form of the concept that they are attempting to translate, but also the manner in which that form changed over time.

Keyword : translation, early modern Japanese history, beggar, early modern status society